

浄教寺の寺宝が

東京国立博物館に出陳されました

このたび、浄教寺（有田川町長田）所蔵の寺宝が、東京国立博物館で開催された特別展「鳥獣戯画（ちようじゅうぎが）」―京都高山寺の至宝―に出陳されました。この展覧会は、墨線のみで動物や人物たちを躍動的に描き、日本絵画屈指の作品とも評価されている国宝、鳥獣戯画の修理が完成したことをうけ、その全巻が公開されるとともに、鳥獣戯画が伝来した高山寺や高山寺を再興した明恵上人と関連する文化財が併せて展示されました。

浄教寺から出陳されたのは、国指定重要文化財である十六羅漢像（じゅうろくらかんぞう）です。これらはかつて田殿丹生神社の裏側に存在し、明恵上人もその後方で修行を行った最勝寺（さいしょうじ）から浄教寺に伝来したものです。

涅槃図とは、釈迦が亡くなった際の情景を描いたもので、釈迦の周りにはその死を嘆き悲しむ人物や動物が描かれています。鎌倉時代のはじめに制作された浄教寺の涅槃図は、釈迦が横たわる台の上に大きな天蓋（てんがい）が描かれている点をはじめ、通例の涅槃図には見ら

れない特徴が数多くあり、このような特徴的な図案は明恵上人の思想を反映したものではないかと考えられています。

羅漢（らかん）とは、釈迦の教えを守る従者として信仰され、日本においては鎌倉時代以降に羅漢図の制作が盛んになりました。明恵上人は、羅漢に特別な思い入れを持ち、自身の存在を羅漢に重ね合わせていたとも考えられており、今回の展示会でも各地の十六羅漢像が展示されました。

浄教寺に伝来するこれらの寺宝は、自らに厳しい修行を課すとともに、多くの後進を育て、戦乱によって身寄りを失った女性たちを保護するなど、実践的な宗教活動を行ない、多くの人びとに慕われた明恵上人の思想を知る貴重な文化遺産です。

